

ニホンマムシ：関

わいるとらいふ

Wildlife

No.30

2013年3月20日

NPO法人 宮崎野生動物研究会

Miyazaki Wildlife Research Group

九州ウミガメ情報交換会 in 宮崎

つい先日の3月9日（土）に、当研究会の竹下会長と屋久島ウミガメ館の大牟田一美氏が発起人となり、九州管内でウミガメの調査・保護に関わる方たちが集まり情報交換会が行われました。



情報交換会の様子

集まったのは「宮崎野生動物研究会」、「宮崎大学 WILA」をはじめ、県内からは「日向アカウミガメ研究会」。福岡からは「勝浦ウミガメ塾」、「福津市役所ウミガメ課」、大分からは「おおいた環境保全フォーラム」、鹿児島からは「屋久島ウミガメ館」、「奄美海洋生物研究所」、「種子島タートルクルー」と、計9団体、31名。また、夜の懇親会では「日南ウミガメ研究会」の方も加わり、現場で調査をする者同士で大いに語り合いました。

今回は初の顔合わせとなる団体が多く、情報

交換会では、それぞれの活動報告が主だったものとなり、各団体での工夫点や問題点を自由に発表し合う場となりました。

興味深かったのは、甲長が86 cmを超えるような大きなアカウミガメは、産卵後に太平洋ではなく東シナ海へ向かうという発表で、これは当研究会が2002年に実施したアルゴス発信機を装着して産卵後の回遊経路を調査した時の結果に合致していました。理由として推測できることは、大きなウミガメは深く潜れることで、東シナ海の海底にいる大量のカニなどを餌と出来るからなのだとっていました。太平洋へ回遊する個体はあまり深くは潜らないのだとも・・・なるほど



宮崎野生動物研究会からは関さん、竹下さん、宮崎大学 WILA がそれぞれ発表されました。

また、「勝浦ウミガメ塾」では、上陸数は年に数頭ぐらいなのですが、ウミガメを呼ぼうと活動しているということで並々ならぬエネルギーを感じました。

ほかの団体がどこで、どんな活動をしているのかが分かり、有意義な情報交換会となりました。次回開催を望む声も多く、懇談会において、幹部は主要団体の代表者になり、「九州ウミガメ連絡会」（代表：大牟田一美氏）として来年は実施される運びとなりました。

来年4月に開催予定で、開催地は鹿児島とのこと、ぜひ次回も参加したいと思います。



懇親会（皆さんと“アイラブユー”のポーズで）

関 希美

九州ウミガメ情報交換会プログラム

●開会式

発起人挨拶：竹下 完

（宮崎野生動物研究会）

大牟田 一美

（屋久島ウミガメ館）

●自己紹介ならびに近況報告（各人）

●発表事項

1. 宮崎のウミガメ調査 ••関 希美
2. 屋久島の状況 ••大牟田 一美
3. 大分のウミガメ事情 ••内田 桂
4. 宮崎の海岸産卵状況 ••竹下 完
5. 奄美海洋研究会の活動 ••水野 康二郎
6. 宮崎大学 WILA の活動 ••中林 朗
7. 日向市ウミガメ調査報告 ••大野 裕

●懇談事項

今後の運営、代表者選出、次回開催地等

●閉会

懇談会へ…



動物しつもん箱



【質問】アホウドリって「アホ」な鳥なの？

（小林市 Kさん）

【答え】漢字で「阿呆」な「鳥」と書いて「アホウドリ（阿呆鳥）」。

これは、人間に対して警戒心がほとんどなく、動きものんびりとしていて捕まえるのが簡単だったからだそうです。変な名前なのは日本だけかと思いきや、中国では他の鳥が落としたりした餌を食べて生活していると思われ、「空から魚が落ちてくることを信じているバカな鳥」という意味で「信天翁」と名付けられました。そんな阿呆鳥ですが、実は、数千キロを休まず滑空できるという素晴らしい飛行能力を持っているすごい鳥なのです。

（山本 達哉）

【質問】カメって両生類？は虫類？

（日向市 Sさん）

【答え】カメが陸でも水中でも見られることから、両生類ではないのか？と言われる方も多いのですが、カメはは虫類に分類されます。この2つの違いには「呼吸方法」「卵を産む場所」「卵の殻」「皮膚」などがあげられます。両生類は肺呼吸とエラ呼吸（主に幼生期）と2つの呼吸方法を持ち、水中に薄い膜（中が透けている）を持った卵を産み、皮膚は湿潤性を保った冷たくてプニプニしています。それに対しては虫類は肺呼吸のみを行い、陸上（地中も）に殻を持った卵を産み、皮膚は硬くウロコで覆われていたりします。この違い、覚えておいて損はないと思いますよ？

（山本 達哉）

野ネズミ捕獲大作戦

夏が過ぎ、いよいよ秋。厳しい冬を乗り切るための野生動物の知恵で、食欲旺盛になります。動物園の飼料係は、新鮮な栄養のある安い餌を集めるのに苦労します。ところが動物園では、展示動物の他にどこからか、野生動物たちも集まってきては餌を失敬していくのです。例えばゴイサギやスズメ、カラス、ハトといった連中で、その餌の量も馬鹿にならないのです。でも彼らは昼間に現れるので監視をして追い払うことが出来ますが、もっと頭を悩ますのは夜行性の野ネズミたちです。

クマネズミとドブネズミは昼間は姿を見せませんが、従業員が帰る夜間になると出現して、飼料倉庫を中心に手当たり次第食べ物をあさります。たかがネズミと置いていても食欲はものすごいし、数も多く、いたる所に穴を開け、夜の動物舎はまるでネズミたちの天国です。それに彼らはどこにでも潜り込み糞や尿をし、それが伝染病の原因になるので衛生的にも厄介者なのです。そこで係員はトラップや最新式の電気捕獲機、殺鼠剤などを購入して対応してきましたが、彼らも知恵がありそう簡単には捕まりません。さらに繁殖力が強く次から次に数は増え、なんと月に数十万円の被害が出てお手上げでした。

そこで私は何とかしてネズミ退治が出来な



いものかと全職員に、賞金付の「ネズミウォンテッド」を企画しました。もちろんこれは私のポケットマネーから捻出しました。一人月に5匹以上捕獲すると、1匹につき50円の奨励金をあげると決めたのです。「たったの50円か。」それでもみんなは笑いながら取り組んでくれました。でも、ネズミたちもそう簡単には捕れませんでした。15人の職員で1か月に50匹も捕れたらいい方で、1匹も捕れない人もいました。私も安心していましたが、数ヶ月するとある職員が、宿直をしながら熱心にネズミの研究を始めました。何時頃出てきてどの道を通り、何を一番好むのか。1日のネズミの行動もわかってきました。そこでいよいよ本格的な捕獲が始まりました。なんと、一人で80匹も捕獲したのです。今度は仲間も競争となって次から次へと捕獲機が考案され、長老から聞いたという秘伝のユニークな捕獲機まで現れました。それがまたよく捕れたのです。捕獲数はなんと、月に300匹にもなりました。賞金額もネズミ算式に増えてきて、私は大損害となりました。そんなある日、NHKの記者が聞きつけたらしく、事務所にあげていた野ネズミ捕獲成績表を発見するとこれは面白いと全国にテレビ放映されました。私たちだけが困っていると思いましたが、ネズミ取りはなんと、全国のいろいろなところで苦労しているらしく、捕獲の秘伝を伝授して欲しいと連絡が舞い込んできました。動物園は動物を可愛がる場所。いくらいたずらをするからといってむやみに教えることも出来ず、こればかりは頭痛の種となりました。でもネズミ捕獲名人も生まれ、教えると喜ばれました。そのうち動物園のネズミも激減し、私の被害も少なくなり、野ネズミ捕獲大作戦も成功の内に終了しました。

竹下 完

宮崎の動物(特別編)

『ヘビ』

2013年は巳年(ヘビ年)です。手足のない細長い体。くねくねとした動き。苦手な方も多いと思います。しかし、一口にヘビといっても好む場所や食べる餌など意外と違いがあるものです。

今回は宮崎県内で見ることのできるヘビをご紹介します。

アオダイショウ

全長

110 ~ 200cm
もっとも普通に見られるヘビです。体色はオリーブ色から緑がかった褐色



で、かなり青味の強い個体や灰色がかかるものもいます。山口県岩国市の白化個体(アルビノ)は国の天然記念物です。幼蛇のときははしご型横斑が



幼体

入るため、マムシに間違えられることもあります。いろいろな環境に適應することができ、泳ぎも上手です。

幼蛇はカエルやトカゲ類を好みますが、成長すると鳥類やその卵、小型の哺乳類(ネズミなど)を食べます。

シマヘビ

全長

80 ~ 150cm
アオダイショウと並んでよく見られるヘビです



が、小型で細身なので見分けることができます。背面は褐色で、体に4本の黒い縦縞が入ります。体色や縦縞に変異が多く、全身黒色の個体はカラスヘビとも呼ばれます(宮崎でも見ます)。虹彩が赤く、昼行性でヘビでは珍しく瞳は楕円に近い

縦長です。低地から山地に広くすんでいて、動きは素早く、攻撃的です。

カエルを好みますが、トカゲや鳥類、小型哺乳類、時にはヘビなども食べます。

ヒバカリ

全長

40 ~ 60cm
「咬まれたらその日ばかりの命」という意味の名前です



が、無毒です。体色は茶褐色から淡褐色です。頸もとに白い斑紋があり、幼蛇は黄色や淡黄色の鮮やかな色をしています。山地や低地の森林、田園などで見られ、水辺や湿地にいることが多いようです。朝や夕方、曇りの日などによく活動します。

カエルやオタマジャクシ、小魚やミミズを好んで食べ、体の割には大食いです。

ジムグリ

全長

70 ~ 100cm
日本の固有種です。赤茶色の地に黒褐色の斑点があります。腹面には黒い市松模様が見られますが、無いものもあります。幼蛇は成蛇よりも鮮やかな色をしており、



幼体

赤味が強く黒斑が占める面積も大きくなっています。

山地の森林内や林縁部に多く見られ、よく地面に潜ります。温和で進んで咬みつくようなことはありませんが、臭腺から独特の悪臭を放ちます。

主に小型のネズミを捕まえて食べます。

シロマダラ

全長

30~70cm

背面は灰色もしくは白褐色で、黒い横帯がバンド状に入ります。幼



写真提供：末吉豊文

体は斑紋のコントラストが鮮やかで、頭部の後ろ部分に大きな1対の白い斑紋があり、成長と共に消えていきます。攻撃的で、捕まえようとすると咬みつき、効果がないと擬死を行うこともあります。夜行性で、山地から平地までいろいろな環境にすんでいます。

主にトカゲやヘビを食べます。

タカチホヘビ

全長 30~60cm

褐色から紫がかった褐色です。背中に黒いラインがはっきりと尾の先まで入ります。幼蛇は全身黒っぽい色をしており、



写真提供：安本潤一

成体のメスは体色が黄色くなることが多いよう



ミミズを食べているところ

に弱ってしまいます。

ミミズを食べます。

です。地中性かつ夜行性です。ビーズ状で完全には重ならない鱗の構造上、高温や乾燥には極めて弱いようで、人の体温でもすぐ

ニホンマムシ

全長 40~65cm

日本固有種です。毒ヘビとして知られていますが、温和でわざわざ人を咬むようなことはありません。しかし毒性は強く、咬まれ



写真提供：末吉豊文

た場合には早めの対処が必要です。褐色または赤

褐色の地に真ん中に暗色の斑のある楕円形の斑紋が並びます。卵胎生で、卵ではなく子ヘビを産みます。低地から山地にすんでいて、水辺や湿潤な場所に多くみられます。夜行性ですが、冬眠前後や夏の妊娠した雌は昼間に活動するので注意が必要です。

ネズミやカエル、トカゲや小型のヘビ等小型の脊椎動物なら何でも食べます。

ヤマカガシ

全長

70~150cm

以前は無毒とされていたようですが**毒ヘビ**です。毒性は強く、上あご



黒化型 写真提供：末吉豊文

の奥に毒腺があるため深く咬まれたり、長時間咬まれたりすると危険です。また頸にも毒腺を持ち、強くつかむと染み出し、飛び散ることもあり、誤って目に入ると失明の恐れもあります。褐色の地に黒色の斑紋があり、色彩は地域で差があります。西日本では黒化型もよく見られます（宮崎でも見ることがあります）。幼蛇は頸に目立つ黄色い横帯があります。山地から平地にすんでおり、水田や小川などの湿地を好みます。

主にカエル類を好み、オタマジャクシや魚類も食べます。

動物園でヘビの触れ合いをしていると、怖がらずに触る方もいれば、見ただけで回れ右をしてしまう方もいます。でも、大抵の方は怖いもの見たさ(?)で近寄ってきて、恐る恐る初めは指1本。次は掌。最後には首にかけると、思っていた印象とは違う手触りや、ひんやりとした感触に最初の恐怖心はどこへやら。触ることに全く抵抗を感じなくなる方も多いようです。

しかし、動物園で飼育されているヘビはある程度触ることに馴らしてありますが、野生のヘビは攻撃的で毒のあるものもいますので、むやみに触らないようご注意ください。

古根村 幸恵

話題を提供

キツネの話



日本では古い時代から霊的な動物として取り扱われていて、幻覚を起こさせて道に迷わせたり、美しい女性に化けて出たりします。

全国的な共通の話題が多く、講談や狂言、俳諧などにも登場したり、一方では稲荷信仰のような、神の使いとして信じられたりもしています。植物の名前にもたくさんのキツネがついていて、例えばキツネアザミなどは遠目にはアザミの花だが、近寄ってみるとアザミではない。昔の人はキツネに騙された…と感じたのかもしれない。

キツネ火、キツネの嫁入り等はよく知られた現象ですが、前者は一種の蜃気楼であり、後者はキツネの家族が小雨の降る夜に動物の骨をくわえて移動するときに、骨髄に含まれる燐が発火する現象をキツネの提灯行列に見立てた、という一説もあり、キツネにとっては気の毒な話ではあります。風貌からも悪玉として取り上げられたのかもしれない。

佐土原海岸のキツネ

佐土原町域では平成10年前後からカメの卵の食害が急増し、最初は野犬、タヌキ等と考えられていまし



保護用箱罟

た。当時の役場の文化課では、保健所に依頼して大炊田海岸に数ヶ所の箱罟を設置しましたが保護出来ず、タヌキだろうと推察されました。今は故人となられた会員の児玉さんがキツネに出会ったという話から、その後、キツネの食害が定着してきました。

それからキツネの生態を知るべく、図書館通いが始まり、文献により特徴を把握。外見上、耳が大きく、犬と比べて鼻筋が長く尻尾は胴体と同じくらい長く、その先端は白い毛でおおわれています。歩行は直線的で足の爪が長い。それからは足跡によるキツネの判定のみで、実際に出会うのはだいぶ後になりました。

キツネの子育て行動

キツネは通常単独行動をするといわれていますが、6月も半ば頃になるとつがいの行動が見られ、並列の足跡が頻繁に現れるようになります。7月頃になると食害が発生し始めますが、これは子ガメの孵化に関係がありそうです。この頃、夜に堤防の上を懐中電灯で照らすと、動物の両目の反射光が毎晩同じ場所で確認できるようになります。これがキツネの営巣の所在の目印になります。1m50cm位の松の幼木林内を探すと、落ち葉が散り敷くはずの場所に1m四方位の砂が露出してこんもりと山が出来ていて直径30cm位の横穴があります。そこが巣穴で、近くに数ヶ所が点在しています。キツネは必ず逃げ道を作るといわれています。9月頃になると成長した子ギツネを連れて海岸に出てきて餌を探す行動が見られるようになり、急に遭遇すると母ギツネだけが浜堤上に逃げあがり、残した子ギツネを心配してか、しきりに吠え続けます。その頃になると昼間でも餌を探すとみえて、自転車道の上で毎朝のように出会ったものです。巣穴の周辺には鶏の頭とか、ノウサギの足首などが散乱し、露出した砂地も拡大し、おそらく、夜な夜な子ギツネが巣穴から出てじゃれあっていたのかもしれない。この頃がようやく昼間のキツネの素顔が確認できる季節です。



巣穴

キツネの子別れ

佐土原では石崎川に渚橋ができる平成3年までは、大炊田海岸以北でしか確認できなかったキツネの被害が、橋ができたことによって子ギツネが独り立ちすると、橋を渡って南下。テリトリーを広げて石崎浜へと進出が始まりました。現在では人工ビーチ付近まで拡大していると聞きます。それぞれのテリトリーには子育ての巣穴があるはずで、研究してみたい方には絶好のテーマです。巣穴の発見からのスタートをすすめます。

深夜に一人で調査活動を実施される皆さん、海岸で絶世の美人に出会ったら用心が必要です。なお、海岸だけでなく、ニシタチ等には尾のないキツネが住んでいると聞きます。騙されないように、用心、用心。

小豆野 次則

オオイタサンショウウオの産卵行動

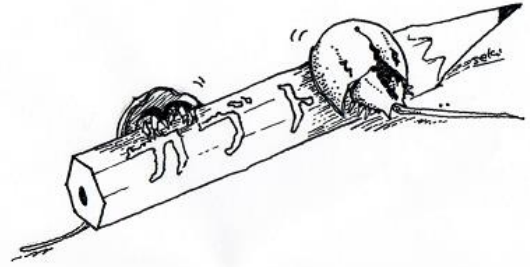
オオイタサンショウウオの保護活動をするようになって8年目になります。保護活動といっても毎年12月に、使われなくなった水田水路の泥上げをして産卵場所を作り、産卵を確認し成長を観察、近隣の住民の方々に啓発をするだけです。産卵は未明に行われると書いてある記事を見つけましたが、産卵は1～2月に行われますので、冬の未明は寒く観察に行く元気は出ませんでした。

保護活動を始めて6年目に、親の様子がいつもと違うことに気がきました。いつもは水底の落ち葉などの物陰に隠れて動きませんが、この日は水たまりにいるすべての親がゆっくりと泳いでいます。1匹の親がすーっと水面近くに泳いできて竹の枝にしがみつきました。すると、突然周りにいた親たちがその回りをもろすごい勢いで回転し始めました。いったい何事が起こったのか分かりませんでした。数分後にこの騒ぎはおさまり、竹の枝に小さな卵塊が着いているのを見つけて初めて産卵行動だったことに気がきました。この後も何回も産卵に出合いましたが、未明ではなくすべて昼間の正午頃でした。 西 邦雄



オオイタサンショウウオの産卵行動

カブトガニ



西田 伸

前回の長友さんのオウムガイに続いて、今回は「生きた化石」つながりで、そして私の研究対象のカブトガニのお話を。2億年以上ものあいだ、その「形」を変化させてない＝変化させる必要のなかった生物です。カニという名前がついていますが、実はクモやサソリに近い仲間。アジアに3種類：日本にも生息しているカブトガニ、東南アジアにミナミカブトガニとマルオカブトガニ、そしてアメリカ西海岸にアメリカカブトガニと4種類が現生です。残念ながら宮崎には居ないのですが…日本では瀬戸内海から北部九州・九十九島-佐世保、大村湾まで分布しています。彼らは干潟を中心とした生態系の代表種。7月～8月の泥干潟に隣接した砂浜にやってきて産卵します。オスはメスより一回り小さくて(一回脱皮の回数が少ない)、メスにつかまって～逃げられないように？捨てられないように？して一緒に産卵場へやってきます。成体になるまで10年以上。そんなカブトガニですが、干拓・沿岸道路、海砂採取などによる生息地の破壊により絶滅が心配されています。2億年つないできた命が数十年で消えてしまう…ヒトの繁栄と…本当に考えさせられます。



フィリピン・パラワン島のカブトガニ。日本の種と同じものです。

次は、藤本綾乃さんをお願いします。

野生研のあしあと

平成 24 年

- 12/1 24 年度宮崎県自然保護推進大会開催
(JAアズムホール)
- 12/13 ウミガメ調査地の海岸の撮影
高鍋から白浜まで編集する
- 12/18 野生研 12 月例会
- 12/19 24 年度ウミガメ報告を宮崎県に提出
- 12/24 わいるどらいふ 29 号の発行と配布

平成 25 年

- 1/10 宮崎県ウミガメ調査地の海岸撮影の
編集を行う(撮影:西 編集:関・竹下)
- 1/15 野生研 1 月例会 大宮青少年プラザ
- ① 3 月 9 日 13:00 より「九州ウミガメ
情報連絡会」を宮崎県で開催予定
屋久島、奄美、大分、種子島、鹿児
島、沖永良部などからこられる予定
- ② わいるどらいふ 30 号編集
フリートーク「キツネの行動について」
小豆野
- 2/12 野生研 2 月例会
- ① 九州ウミガメ情報交換会の開催準備に
ついて
- ② ウミガメ展について 4 月 1 日から 30
日まで平和台公園にはわ館を借りて開
催予定。協力をお願いします。
- ③ わいるどらいふ 30 号の編集
- 2/15 24 年度ウミガメ報告書を宮崎市に提出
- 2/28 24 年度カモシカ調査報告書を宮崎県に
提出

動物記録

平成 24 年

- 11/2 ガラパゴスゾウガメ「ジョージ」は孤独
じゃなかった。“親類”他島で発見。
【南日本新聞】
- 11/27 世界の気温、2100 年までに 20%の確
率で 4 度上昇。【読売新聞】
- 12/2 2012 年全国でのアカウミガメ産卵・
上陸回数最多。本県産卵 2144 回。保護
活動が効果。(訂正:実際は 2142 回)
【宮崎日日新聞】
- 12/8 絶滅危惧種オヤニラミ確認相次ぐ。五
ヶ瀬川水系繁殖の可能性も。
【夕刊デイリー】

平成 25 年

- 1/13 太平洋のサメ激減。フカヒレ目当て乱
獲一因。資源管理は急務。
【宮崎日日新聞】
- 2/2 ニホンウナギ、環境省レッドリストに
絶滅危惧 I B 類として指定。【朝日新聞】
- 2/5 中国大気汚染(PM2.5)北京で呼吸器
系疾患増。日本各地で警戒強まる。
【宮崎日日新聞】
- 2/14 マダニ感染症、本県で死者確認。愛媛
県でも。日本で 3 人目。【宮崎日日新聞】
- 2/19 臍臓再生、ブタ同士成功。東大・明大
移植用臓器作製へ前進。【西日本新聞】

寄付のお礼

坪内 晃 様

以前宮崎に住んでおられ、現在は大阪にお住まい
です。宮崎のウミガメ保護のために寄付をいた
だきました。ありがとうございました。



宮崎野生動物研究会通信「わいるどらいふ」 No.30 2013年3月20日発行

特定非営利活動法人

宮崎野生動物研究会 (Miyazaki Wildlife Research Group)

代表 竹下 完

880-0825 宮崎市東大宮 3 丁目 9-11

Tel 0985-25-7585 Fax 0985-25-7585

Email: kan-take@miyazaki-catv.ne.jp http://www.m-yaseiken.org



欄干動物記:ウミガメ

「わいるどらいふ」の無断引用、転載、複製を禁止します。